

『アッシャー家の崩壊』の

冥府志向について

前 田 禮 子

E・A・ポーの『アッシャー家の崩壊』については、これまでいろいろ云われてきた。マリー・ボナパルトによる母親複合や、D・Hローレンスによる vampire-motif と近親相姦などの指摘が、代表的なものであろう。そういった解釈では満足しきれないものが、いぜんとして残るのである。それらは何かといえば、マデリンの役割とか超常現象とか、作者の意図とかであるが、どうにも釈然としない。

そういったことをふまえたうえで、一つの試みであるが、ポーの意図はつよい冥府への志向であったといえるのではないかと思われるのである。ここでいう冥府とは、いわゆる死という意味ではなくて、ギリシャ的な黄泉の国のことである。オルフェが妻のユリディーチェを慕って下りて行ったところである。

オルフェ・モチーフが母親複合といえるかどうかは別として、ポーの作品のじつに数多くに、オルフェ・モチーフが見られるのである。『約束』(‘*The Assignment*’)の中で、訪問客がテーブルの上に置かれた一冊の本をふと取り上げると、それが『オルフェ』であった、などは、かなりはっきりと、ポーがオルフェ・モチーフのことを暗示したものだろう。『リジーア』などは、あきらかにこのモチーフに属する。

死とは、単純にゼロの世界であらうけれども、黄泉とか冥府などは、ゼロのかなたのマイナスの世界といえるだろう。そこは、混沌と陶醉の魔の世界である。そういった世界には、超常現象が生きている。

『アッシャー家』のロデリックが好んで読んだ本のうちには、こういうものがあつた。

グレセの『ヴェルヴェル』と『シャルトルーズ』(the *Ververt et Chartreuse* of Gresset), マキャベリの『ベルフェゴール』(the *Belphegor* of Machiavelli), スエーデンボルグの『天国と地獄』(the *Heaven and Hell* of Swedenborg), ホルベルヒの『ニコラス・クリムの地下旅行』(the *Subterranean Voyage of Nicholas Klimm* by Holberg), ロバート・フラッドやジャン・ダンダジネあるいはド・ラ・シャンブルなどの『手相学』(the *Chiromancy* of Robert Flud, of Jean D'Indaginé, and of De la Chambre), ティークの『はるかな青い彼方へ』(the *Journey into the Blue Distance* of Tiek), カンパネラの『太陽の都』(the *City of the Sun* of Campanella) などがあつた。「愛読書の一つは、ドミニク派の僧エイメリック・ド・ジロンスの『宗教裁判法』(the *Directorium*

Inquisitorum by the Dominican Eymeric de Gironne) という小さな八つ折判本であった。またポンポニウス・メラ (Pomponius Mela) の著作に出てくる 古代アフリカの半獣神やイージパン人種 (the *Old African Satyrs and Oegipans*) についての章を、アッシャーは何時間も夢見心地で耽読したものだ。だが彼の最上の喜びは、四つ折判ゴシック字体の稀覯本——ある忘れられた教会の祈祷書——『マインツ教会聖歌隊による死者のための通夜』(an exceedingly rare and curious book in quarto Gothic—the manual of a forgotten church—the *Vigilliae Mortuorum Secundum Chorus Ecclesiae Maguntinae*) の耽読^①にあった。」

ロデリックの書斎の中の書物は、マボットによれば、『悲しき会合』(*the Mad Trist*) 以外は、いずれも実在の書物である。以下、マボットの述べるところはよれば、ポーは、これらの書物が、霊力が物質に浸透するという概念を扱っていると思っていたらしい。「二生の魂」(“bipart soul”) という概念や、また小宇宙と大宇宙との関連性を扱っていると思っていたらしい。上記の書物のうちには、ポーが読んだはずがないものもいくつかあるが、どらいう性質の内容かは、百科辞典で知ったり、また、ニューヨークでともに下宿をしたことのある書籍商ガワンス (William Gowans) から聞き知ったのであろう、ということである。

まず『おうむのヴェルヴェル』は、1834年に出版された詩であり、ポーは読んでいたと思われる。ヴェルヴェルは修道院の おうむであった。なにもわからずにしゃべっていたが、ときには聖なることを意味深く語ることがあった。彼はあるとき水辺を訪れて、冒瀆的な言葉を口にするをおぼえ、追いはられる。しかし失意のうちにも再び家に帰りつき、許され、女子大修院長の腕に抱かれて死ぬ。この詩は、英雄的な雄大さと同時に道化の茶番じみた面ももっていたといわれる。ジェスイット教団はこの詩を認めなかったけれども、多くの読者はこの詩にもろい人間性にたいする深遠な含蓄をもつ寓意を見出している。『シャルトルーズ』の方は、ポーは読んでいなかったであろうとのことである。

『ベルフェゴール』は、1515年に書かれたもので、早くも 1660 年に 英語に 訳されている。主人公は落された大天使である。彼は、妻たちが原因で劫罰に落される多くの魂の訴えを調べるために地上にやってくる。フローレンスで、彼は金銭に十分恵まれて、美しいオネスタ・ドネスティと結婚するが、彼女は財産を全部巻き上げて彼を丸裸にする。彼は債務者たちから逃げ出さなければならなくなる。しかし彼は、つづけざまに三人の女性と情交 (“possess”) を結ぶ。結局、彼の妻が彼を追いかけてくるということを耳にして、彼は地獄に帰る、という物語である。ここで、マボットはこの “possess” three ladies につけ加えて「魔性がとりつくこと、このことがロデリックをとりこにしている (The demoniac possession is what fascinates Roderick Usher.)」と述べている。

『地下旅行』は、近代デンマーク文学の祖であるホルベルク (1684—1754) の作品であ

る。地下の国があって、その住人は、歩行や会話の可能な樹木である。

『手相学』についての古くからの書物もいくらか英訳されたものがあったが、おそらくポーは、それらのいずれも読んではいなかっただろうが、しかしあきらかに、つぎのことは知っていただろう。運勢を知る方法は星の位置と手相の形状などなどとの、つまり大宇宙と小宇宙との神秘的な関係を解くということにある、ということ。

『青い彼方への旅』についてポーは『マージナリア』の第78において言及している。ある作品の作中の風刺にみちた幻想物語である。当世趣味の悪徳のかずかずを暴露した妖精の国の物語である。グロリアーナ (Gloriana) という妖精の女王と結婚した中世の貴族の冒険が語られている。彼女は山の内側にある楽園を統治している。そこには、ダンテやチョーサーやシェークスピアのような偉大な詩人たちが住んでいる。醜怪な地の精 (gnome) たちがホフマンやユーゴーのような作家たちにとりついている。グロリアーナの使者が若きゲーテを抱擁する、などなど。

『宗教裁判法』のジロンヌは、1356年にアラゴンの異端審問官になった人である。彼は異端者を取調べる僧に与えるための指示や、ロデリックが参照することをねがっているような禁書の一覧表を書きしるした。『宗教裁判法』の初版が出されたのは1503年あった。

ポンポニウス・メラは1世紀ローマの地理学者であった。彼の名は『妖精の島』の脚註の中でポーが言及している。ロデリックが魅せられた文章は、つぎのものであった。

The fields, as can be seen, are those of the Pans and Satyrs. This opinion is held because, although there is no trace of cultivation therein, no houses of inhabitants, no pathways, a solitude vast by day, and a vaster silence, at night frequent fires gleam, and as if camps widely spread are indicated, cymbals and drums resound, and flutes are heard, sounding more than human.

(野には、見はるかすかぎり牧羊神むれいたると人のいう。田畑らしきもの、人の住いも道らしきものも見あたらず、昼はただ、大いなる佇しさとさらなる沈黙のみあり、夜さりには、不知火ちらら輝けり、遠くちらばりたるねぐらのありか示さんかのよう、シンバル、たいこあまた響きたり、横笛もまた人のわざ超えたる音色もて聞えたるに。)

「『マインツ教会聖歌隊による死者のための通夜は、ケンブリジ大学図書館に一冊あるけれども、ポーの時代にアメリカには、印刷されたもので入手できるようなものはなかった。しかし彼の友人のガワنزは、古版本 (incunabula) に興味をもっていて、ポーにこの稀観本のことを話したかもしれない。ポーは旧教のことはほとんど知らなかったもので、この書物を異端のものだと誤って思いこんでいたかもしれない。1500年ごろのマインツの儀式はしかし、1839年にバルチモアで用いられていたものと、重要な点においてはほとんど違ってはいない。」

以上、ロデリックが愛読した古書のうち本邦で資料の入手が困難なものについてのマボットによる解説である。ほかに『天国と地獄』と『太陽の都』があるが、これらのテキストはたやすく手に入る。『天国と地獄』は、幻視者スエーデンボルグによる霊界の記録である。

ポーは、創作の原理として、不必要な言葉は一言半句も用いるべきではないと唱えていたことから推して、ロデリックの読書傾向を伝えるのに、これらの書物の名を挙げたということは、これらの書物が『アッシャー家』という作品の意図を知るためには、不可欠のものであると解釈してよいだろう。

『ヴェルヴェル』のばあい、たとえばこんなふうには考えられないだろうか。なにもわからずに話しているのは、ロデリックの友人である私という人物にあたるのではないだろうか。私は『アッシャー家』の事件やロデリックの姿を目にしたありのままを物語っている。ときには、自分なりの解釈を加えてはいるが、おそらくそれは表面的なものであって、私はほんとうの解釈を下してはいないだろう。しかし私の語る表面的な言葉のなかに、作品の意味を知るための、いわば陰喩がちりばめられているのであろう。かたや全知の人物と同時にまるっきり単純で無知な人物を配するのは『盗まれた手紙』など一連の探偵小説におけるデュパン氏と私という第三者はいうまでもなく『黄金虫』、『約束ごと』、『ナンタケット島出身アーサー・ゴードン・ピムの物語』ほか、この『アッシャー家』のばあいもそうであるが、無知な人物が、なにもわからず深遠な含蓄のある言葉を話している、という手法は、ほとんどポーの常套手段であるといえるだろう。推理小説というジャンルの創始者といわれるポーの作品は、多かれ少かれすべて推理小説の要素をそなえており、かくされた意味を見出すための手掛りは、私という無知な人物の言葉のなかにあるといってもよいだろう。また、私の言葉の表面的な説明からは、茶番にすぎない物語としか映らないが、そのじつ、深い寓意がこめられているという手法などは『ヴェルヴェル』のおうむと共通するところであるといえるだろう。

『ベルフェゴール』は、マボットの資料だけから判断するのでよくわからないが、パロディであるらしいということと「魔につかれた」(demoniac possession) というところとは、たしかに『アッシャー家』と共通するものをもっている。ロデリックが正気を失っていくことについて彼自身の口から不安の念を表わしているが、それは果して、邸や周囲の風景からたちこめるもののけの影響をうけるというような消極的なものだけだろうか。

『魔の宮殿』(*The Haunted House*) に夜な夜な出没する魔は、もっと具体的な魔性のもの(demoniac) であるような気がしてならない。そのことは、ロデリックのちょっとした言葉のはしばしからもうかがわれる。ロデリックが打ちひしがれている恐怖は、たんにわが身の死や一族の途絶というだけのものではなかろう。もっと魔性のもの、いうなれば黒ミサと関係のあるものではないかという気がしてならない。このことについては、もっ

とくわしく述べなければならないが、上にあげられた書物について、まずふれることにする。

『太陽の都』は、仮空のユートピアの世界であって、そこは、精神的な高くきびしい規律によって律せられている。『天国と地獄』もたんなる幻想の世界ではなく、高度の精神や道徳律によって導かれる段階の高いストイックな世界である。『ヴェルヴェル』も道化のかげにストイックな世界がえがかれているのである。『地下旅行』は、書名のとおりに、地下の国のことであって、そこは、地上の人間とはまったく別種の種族が住んでいる仮空の世界である。山の内部にあることになっている『青い彼方への旅』も、半人半獣神のいるメラの物語も、仮空の仙境である。『ベェルフェゴール』の地獄も『天国と地獄』の地獄も、ダンテやミルトンをまつまでもなく、もっと古くから、人々の心の中に存在していた世界である。同様に民間伝承の中で、さまざまなかたちの仙境や地下の国とその住人たちのことが語り継がれてきている。ある意味では、天国より地獄や地下の国についての叙述の方が、はるかに精彩を放っているといってもよいだろう。古くから、そういった別次元の世界が存在するかもしれないという概念やその世界への探求といったことが、人々に妖しい想像をかきたててきたのであった。そして、そういった世界へはどうすれば接近できるか、ある種の通路のような橋渡しの概念もまた同時に存在したのである。それはなにかと云えば、極端な例は黒ミサであるけれども、どんなばあいにも程度の差こそあれ、なんらかの秘密の儀式と試練をくぐり抜けねばならなかった。それは新生のための生みの苦しみといった意味をもつのだろう。『地下旅行』の地下の住人が、樹木でありながら、意志も行動力もあるというのは『アッシャー家』の風景の樹木が、地上のものではない、なにかある意図をもって屋敷とロ德里ックに迫り、長い年月をかけて忍耐づよく影響力を行使し、やがては意を遂げるということと関係があるのだろう。

『青い彼方への旅』は、試練に耐えて、神仙女王と結婚することになる騎士の物語である。女王と騎士という主題は、マリー・ボナパルトがフロイト学説を採用して、ポーの母親複合を説くための根拠となったものであるが、この主題も古くから人々を魅きつけてきた。長い中世の夢は、天国に入ることからいつのまにかはずれて、女性への憧憬にすりかわってしまった。マリア崇拝などは、ヴィーナス崇拝と騎士道精神から派生したものであろうが、ポーに当てはめたような極端な母親複合に帰因させることができるかどうか疑わしい。しかしポーのゴシック・ロマンスに女性崇拝は抜きがたく存在している。『リジーア』や『約束ごと』や、詩では『アナベル・リー』や『ヘレン』などにおいてはいうまでもない。それはおそらく、ポーの当時でも、アーサー王伝説のなかの、騎士ランスロットがグネヴィア王妃が死んで横たわる姿を見て嘆くさまを、人々は文学の主題として、あかず求めたことであろう。美女の死と恋人の嘆きという主題は、ポーの内側の欲求であったばかりでなく、文学を求める読者の側の欲求でもあったろう。

『アッシャー家の崩壊』の冥府志向について

『手相学』は、マボットの指摘にもよるように、大宇宙の運行は、小宇宙の諸相を研究することによって知ることができるというものだろう。この類推という概念は、中世魔術の基本概念である。小宇宙を支配することによって大宇宙を支配するという概念に敷衍されていく。個は全体を代表することができる、あるいは全体は個をかえることによってかえられるという概念は、もとはキリスト教のものである。一組のアダムとイヴという個がもたらした罪が全人類に及び、その罪はまた、一人のキリストという個によって、人類全体が贖われるという思想から出ている。この思想はまた、黒ミサの概念の根柢ともなっている。『手相学』からは、容易に、骨相や人相、体質や気質の概念も出てくるであろう。『手相学』を研究して、ロデリックはなにを知りたかったのか。手相によって個人の命運を予知できるという概念は、天体の運行によって個人の異変や天変地異を知ることができる星占術や暦学と容易に結びつく。そしてなにかある事を決行しようとするさい、機の熟成するのを待ったり、上げ潮どきがいつかを知ることができるだろう。『アッシャー家』に起る天変地異の現象は、私が到着することで、なにかの機が熟したとみるべきだろう。西洋では、満月の夜には、物の怪が力を最大限に発揮できることになっており、黒ミサはつねに満月の夜に執り行われるのである。『アッシャー家』の最後の場面を見るがよい。

Suddenly there shot along the path a wild light and I turned to see whence a gleam so unusual could have issued; for the vast house and its shadows were alone behind me. The radiance was that of the full, setting, and blood-red moon, which now shone vividly through that once barely-discernible fissure, of which I have before spoken as extending from the roof of the building rapidly widened—there came a fierce breath of the whirlwind—the entire orb of satellite burst at once upon my sight—my brain reeled as I saw the mighty walls rushing asunder—

(とつぜん、小径にそって異様な光が走った。わたしはただならぬ光の出所を怪しんで振り返ってみた—背後に広大な邸とその影しかなかったからだ。それは沈みゆく、血のように赤い満月の輝きであった。わたしが前に、館の屋根から土台まで電光形を描いて走っていると述べた。以前はやっと目につく程度であった亀裂を通して、月がまばゆく輝き出したのだ。じっと見つめるうちにも、この亀裂はみるみる拡がり——陣の激しい旋風が巻き起った。にわかに月がその全姿をぼっかり浮び上がらせたと思うと一館の巨大な壁が真二つに裂けて崩れるのを見て—^⑧)

『宗教裁判法』はなんのためかといえば、黒ミサの儀式を執り行うための形式や手順などのためだろう。異端者審問の、とくにスペインの宗教裁判所の異端者弾圧は残忍であった。黒ミサは、血で血を洗うような、残酷であればあるほど効果が高いことになってい

る。幼児が犠牲にされたことは周知の通りであるが、とくにわが子とか血が濃いほどよいとされた。ロデリックとマデリンなど瓜二つの双生児である。たがいの精神感応力はこれ以上望みようがなかったから、また最後の血族というかけがえのない身であったから、儀式の祭壇に捧げるには、ロデリックにとって、マデリン以上のものはありえない。妹にたいする骨肉の情と、ミサのための時が迫ってきて、周囲の状況が彼を逃がれられなくさせていることを察知して、彼は苦悶していたと考えればどうであろう。たんに死を予感するだけで、ロデリックのように恐怖におののくものだろうか。もっと地上のものではない魔性のものにたいする畏敬と恐怖であったのではないだろうか。ロデリックの意志ではどうしようもなく仕組まれている宿命にたいする恐怖ではないだろうか。ロデリックの動揺ぶりは、ただの神経症患者の症状としては、度を越している。

それでは、いったいどこにその証拠があるのか。まず私は、階段の一つでこの邸の侍医に出会った。

His countenance, I thought, wore a mingled expression of low cunning and perplexity. He accosted me with trepidation and passed on.

(その顔には、卑しい狡猾さと、当惑の入りまじった表情が浮んでいるような気がした。侍医はうろたえるような挨拶をして立去った。)

ポーはなんの意味ももたない文章は書かなかったはずだ。あくまでも推測であるが、侍医は、なにかよからぬことに手を貸していたのではないか。マデリンを治療などするのではなく、悪化させることに、というより、破滅させることに手を染めていたのではないだろうか。ロデリックほどの悲劇を感じる立場にもないので、私にふいに会って、やましささがさきにたったのではないか。

マデリンの病気もおかしい。ロデリックの説明を信じようと思えば、信じることもできるが、疑おうと思えば疑うこともできる。マデリンが部屋の奥を音もなく通ったとき、兄は彼女の方を正視できない、自分の非を恥じて熱い涙を流している。彼女の病状は、

The disease of the lady Madeline had long baffled the skill of her physicians. A settled apathy, a gradual wasting away of the person, and frequent although transient affections of a partially cataleptical character, were its unusual diagnosis.

(マデリン姫の病いは、かかりつけの医者たちもすでに匙を投げて久しかった。慢性化した無感覚、次第に進行してゆく肉体の衰弱、そして一時的ながら頻繁に起る硬直症^③の発作が、その珍らしい症状であった。)

この症状にはどこかで出会ったことがある。『鋸山奇談』のベドロウ氏の症状に似てはいないか。彼は主侍医によって、新しい実験的な治療を施されていた。ベドロウ氏は、ひんぱんに催眠術を施されていた。やがてベドロウ氏は、遠隔操作されて、自分で気づかぬまに、どこにいても催眠状態に入るまでになった。彼の肉体は年令もわからぬほどに衰弱

『アッシャー家の崩壊』の冥府志向について

していた。慢性化した無感覚、ひんぱんに起る硬直症は、ロデリックの言うような珍しい症状などではなく、ひんぱんな催眠による典型的な症状である。ベドロウ氏は、催眠状態にあったとき、きわめて鋭く感受力が目覚める。ロデリックのいう異常感覚——感覚の病的な鋭敏さ——は催眠状態に特有のものである。ベドロウ氏は催眠状態にあっては、前世の記憶がよみがえるほどに、無意識の感受力が高められている。その高められた感受力が得たものや発揮した力を主治医は、遠隔感応によって、彼自身は覚醒した状態のまま、自分のものにすることができた。マデリンもロデリックのために同様の働きをしていたと考えるのは行き過ぎだろうか。

ロデリックは、私に真実を全く語ってはいないで、それどころか、偽るばかりではなかったろうか。それは態度に現われている。

In the manner of my friend I was at once struck with an incoherence—an inconsistency;

(友人の態度にどこか辻褃の合かぬところがあるのに、わたしはすぐと気づいた—矛盾とでも言おうか。)

すぐあとにつづく、

His voice varied rapidly from a tremulous indecision to that species of energetic concision—

(その声は煮え切らぬ震えをおびた調子から、たちまち一変して勢いこんだ分裂^④ぶりに—)

は、これまで、躁鬱患者の病状とみなされてきている。しかし躁鬱病のばあい、躁の状態から鬱の状態へ移行するには、いくらか時間の経過をとまなっているはずだ。それほど短時間内に、くるくるめまぐるしく躁から鬱、鬱から躁の状態にかわるはずがない。ロデリックが躁鬱症的体質をもっていることはまちがいない。しかし引用したロデックの態度は、偽りと真実とのあいだで苦しんでいるためだろう。それらしき作為の感じられる言葉はいたるところにちりばめられている。私が到着した同じ日にマデリンが死の床につく、なども時を同じくしすぎる。私の到着を待つて事が始まったのだ。

秘伝の儀式 (initiation ceremony) と試錬が段階のことになった世界や異次元の世界へ行くための通路の役割を果たす、とすでに述べた。それがここでは、黒ミサのことであるが、こういった暗黒のおぞましい概念も、もとはといえば、すべて聖書の奇蹟に典拠を求めることができる。キリストが十字架の上に受難の死を遂げたことによって、神の栄光があらわされ、人類の救済が実現したという秘蹟を、黒魔術がそのまま踏襲しているのである。それも、そっくりそのまま冒瀆的に裏がえしてあるのだ。ポンポニウス・メラの著作にえがかれている半人半獣神たちの世界が入ってくるのである。彼らは古代ローマの農業神であるけれども、キリスト教の悪魔と同一視されることがある。牧羊神の世界は、多産を目的

とするため、混沌と陶醉と淫乱の世界である。そのためか、キリスト教にたいする冒瀆は、つねに淫乱をともなっている。ロデリックとマデリンとの関係もおそらく、ローレンスが指摘したとうりであろう。そうすることによって秘蹟をますことができると信じられているのである。このことは、マリアと神との交合によってキリストが誕生した秘蹟ともからめてあるのである。要するに黒魔術も白魔術も同じ延長線上にあって、ロデリックが引きずりこまれることになった黒魔術の世界は、キリスト教の裏側にあって、西洋の暗黒を代表し、キリスト教とともに生息してきた隠微な世界である。

マデリンは冥府の大君に捧げられ、試練に耐えて、なにかある超常的な力を授けられて、ロデリックを先導 (usher) してつれて行くために帰ってきたのだ。ロデリックは語源からして、栄光の支配者 (Glory+ruler) の意味をもっているし、マデリンは同様に、マグダラのマリア (Magdalene) の意味である。このことについては、すでに別稿で述べたことがある^⑧。マグダラのマリアは、キリストが葬られた墓穴を訪ねて行って、甦ったキリストを最初に発見した女であった。そういえば、キリストの甦りを祝う復活祭は、3月21日またはそれ以後の満月の次の第一日曜日ときめられている。やはり満月が関係している。そして3月21日は春分の日で、農業と関係がある。ディオニソスの要素が深くキリスト教とかかわっていることがわかる。

『マインワ教会聖歌隊による一』もなんのために必要であったか察しがつく。絵を画いたり、音楽を奏でたりしたのは、マデリンの魂が冥府に下る道行きのためと同時に招魂のためであったろう。とくに音楽は、陶醉そのものであるから、ディオニソス的である。ロデリックはしばし即興で狂おしい音楽を奏でた。ウェーバーの最後のワルツは、死の数時間前に作られたものといわれる。ピアノ曲であるそう^⑨だ。ピアノ曲をギターで演奏するのは難しいと思われるけれども、これは不問にせざるをえない。ギターは、その昔アポロやオルフェがつかった琴にもっともよく似ているだろう。オルフェは、妻を冥府からつれもどすために、おそらくロデリックが眠っているマデリンを呼びさますために弾いたように、琴を弾いたであろう。そのさまは、こんなふうであったろう。

It was, perhaps, the narrow limits to which he thus confined himself upon the guitar, which gave birth, in great measure, the fantastic character of his performances. But the fervid facility of his impromptus could not be so accounted for. They must have been, and were, in the notes, as well as in the words of his wild fantasias, the result of that intense mental collectedness and concentration to which I have previously alluded as observable only in particular moments of the highest artificial excitement.

(ギターを引くにも、ごく限られた曲目のみにとどまったことが、おそらくはその特異な演奏を生み出すに力があったに違いない。だが、即興曲の熱に浮かされたような

『アッシャー家の崩壊』の冥府志向について

巧みさは、とうていそのようなことで説明のつくものではなかった。彼の狂おしい幻想曲の、歌詞はもとより調べも、やはり前に述べたごとく、人為的興奮の最高に高まった瞬間にのみ見られる、あの強烈な精神の集中と 落着きの 結果であつたに 違いなく、またそうであつた。)

オルフェは、石にも涙を流させ、冥府の王の心も動かせることができたほどであつたがロデリックもまたそうだった。

「わが心は吊るされたる琵琶のごとく、ふるる人あらば疾く鳴りひびかん」このモットーに、ロデリックとオルフェがだぶって映るのである。宿命に流されるロデリックにはオルフェの悲劇がだぶって映るのである。

- ① Thomas O. mabbott: Edgar Allan Poe (Tales and Sketches) (The Belknap Press of Harvarb Univ. Press, 1978) p. 419～421
- ⑤ ditto p. 48
- ②③④ 訳文は『ポー全集』（東京創元新社）より
- ⑥ 『鋸山奇談の転生思想について』（大手前女子大学論集第11号）